2021.12.19 七里教会・クリスマス礼拝　　最上 光宏

「飼い葉おけの主」　ルカによる福音書 2:1-7

クリスマスおめでとうございます。クリスマスと言うと、だれしも、華やかで賑わいだ、明るく楽しいイメージを抱いておられるのではないかと思います。たしかに、クリスマスは大きな喜びの出来事です。しかし、その喜びは、単なるお祭り騒ぎのように、後に虚しさだけを残すような喜びではありません。世界の全ての人を救うために来られた神の御子、イエス・キリストの降誕を記念するお祝いだからです。

聖書において、この御子の降誕の出来事は、天使が現れたり、羊飼いや、東の国の博士たちが星に導かれて拝みに来たりと、幻想的にメルヘンの世界のように描かれていますが、現実に起こった出来事は、実に厳しいものであったと思います。その厳しさを象徴するのが、イエスさまがお生まれになり、宿られた場所が「飼い葉おけ」であった、ということです。

「飼い葉おけ」とは、牛や馬やロバなどの家畜の餌を入れる桶のことです。今、街で見かけることはできませんが、昔は牛や馬を飼っている農家でよく見かけたものです。世界の救い主、神の御子であられる主イエス・キリストは、そのような家畜小屋の中の「飼い葉おけ」の中に生を受けられたのです。なぜ、イエスさまはそのような貧しく悲惨な場所に生を受けねばならなかったのでしょうか。

今日のルカによる福音書 2 章 1 節には、その第一の理由として、時代的・政治的な背景のことが記されています。「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た」と。このアウグストゥスは、ローマ帝国の初代皇帝で、武力で地中海沿岸一帯を支配し、一大「ローマ帝国」を築いた人です。ユダヤの国も、そのローマ帝国の支配下に置かれ、最初の住民登録がなされることになったのです。この「住民登録」は前の聖書では「人口調査」と訳されていましたが、ローマの支配下にある全住民を登録させ・調査し、抜かりなく税金を取り立て、体力のある若者を兵士として徴兵し、労働力として使用し得るものを徴用するためのものでした。これがどれほど徹底した過酷な調査・登録であったかということは、すべての住民を強制的に本籍地に帰らせて、それぞれの町役場で登録させるというやり方からも分かります。

ヨセフは、ダビデの家系に属するので、ユダヤのベツレヘムにまで行かなければなりませんでした。これまで住んでいたガリラヤのナザレからベツレヘムまでの道のりは、徒歩で 5 日もかかる日程でした。いいなずけのマリアのお腹の中には、聖霊によって身ごもった赤ちゃんが宿っており、臨月を迎えていたのです。そのマリアも一緒に登録しなければならないことになっていました。たとえロバなどの乗り物を使ったとしても、これは危険な長旅です。いつどこで産気づくか分からない命がけの旅です。

権力の座にある者には、なかなか一般庶民の苦しみは分からないようです。自分たちの都合だけで命令を下し、思うままに支配出来る、と思っているようです。しかし、支配される側にとっては、たまったものではありません。人権無視も甚だしいと言わなければなりません。日本でも戦争中、それこそ天皇の勅令によって、赤紙一枚で若者が徴兵され、戦地で多くの命が失われました。こうした支配者の非道な専制政治のありかたが、イエスさまの降誕の背景にあったのです。

ヨセフとマリアは、やっとの思いで、5日間の旅を終えて、無事にベツレヘムの町にたどり着くことが出来たのですが、町は各地から登録のため集まって来た人でごった返していて、どこの宿屋も満員で泊まるところがなかったのです。何とか体を休ませる場所を得たいと、必死で探し求めたのですが、すべて断られて、やむなく、家畜小屋に泊まることになったのです。牛やロバや馬などと一緒に、藁を敷いてやっと身を横たえることが出来たのです。

私は、終戦の年、小学2年生でしたが、空襲を逃れて、岩手県の山奥の農家に、姉と妹と共に預けられ、疎開したことがあります。その農家の建物は「南部曲がり屋」というその地方に多い造りで、家の角の曲がった部分に農耕用の馬小屋がくっついている構造になっていました。馬を大事にして寒さから守ったのでしょう。私たちが寝泊まりした部屋は、馬小屋に隣接してる角の部屋だったものですから、馬小屋の匂いが漂い、よく銀蠅が窓から入ってきました。夜、寝ていると、「どどどど」という地響きがして、初め何だろうと思ったら、馬が立ったままおしっこをする音でした。そういう体験を通して、家畜小屋は、とても人が寝泊まりは出来る場所ではないことを、身をもって体験しました。

そういう家畜小屋の中で、マリアは産気づき、男の子を産んだのです。そんな不潔な暗くて寒い家畜小屋で、しかも助産婦さんも介助する人もいない中で、まだ若い娘が初めてのお産を一人でしなければならないということは、どんなに不安なことであったろうかと思います。ヨセフがそばにいたとしても、こういう時、男は役に立たないものです。せいぜい手を握って「頑張れ、頑張れ」と声をかけることぐらいしかできません。そんな厳しい状況の中で、よく無事にお産ができたものだと思います。ルターは、「マリアが無事に出産できたこと自体が奇跡だ」と述べています。

さて、そのようにして生まれたばかりの赤ちゃんを、家畜に踏まれないように、どうやって守るのか。そこには汚れた飼い葉おけぐらいしかありません。ヨセフはおむつ代わりに持参してきたぼろ切れに包んで、飼い葉おけに寝かせて、ほっとしたのです。それが彼らに出来る精一杯のことだったのです。

ルカによる福音書の記者は、このようなみどりごイエスさまの誕生のいきさつについて、「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」(7b)と説明しています。

「泊まる場所がなかった」。これは「居場所」がないということです。場所がないのではありません。宿屋という人の泊まる場所はあっても、そこにすでに場所を得た人々がいて、だれもこの出産間際の妊婦に場所をあけて、受け入れようとはしなかった、ということです。もし、そこに居合わせた人たちが、少しずつでもこの妊婦のために場所をあけてくれたら、そこに場所を得ることが出来たのに、と思います。要するに、どの宿屋の人々も、身重のマリアとヨセフの立場になって考える余地がなかったということです。みんな自分のことで一杯だったのです。もしその時、自分がその場所にいたとしたら、どうしただろうかと思います。多分私も、長旅で疲れていることを理由に、知らん顔して、自分の確保した居場所を譲ろうとしなかったのではないか、と思います。

そのような、相手への思いやりを欠く宿の人々の心の狭さが、マリアたちを家畜小屋へと追いやり、御子イエスを、狭い不潔な「飼い葉おけ」に押しやってしまったのです。ですから、このイエスさまの宿られた「飼い葉おけ」には、政治的な支配者の無責任さと、自分だけの居場所に満足し、他者の苦しみに無関心な宿屋の住民の冷たさという両方の問題が重なっているのです。

最近シリアやアフガニスタン、ミャンマーなどの「難民」のことが、新聞やテレビなどで報道されます。紛争や迫害・人道危機などによって、自国に住めなくなった人々が、命がけで安住の地を求めて逃れようとしますが、多くの国が入国を求めようとせず、国境を封鎖し、武力で排除しようとするのです。そのため、行き場を失った人々が、飢えや寒さや病に苦しみ、小さな子どもたちや老人たちが次々と命を落としていると聞きます。日本の国内では、福島の原発事故で郷里に住めなくなった人々が今までの仮設住宅から立ち退きを責めたてられ、放射能に汚染された地に帰還せざるを得ないという悲しい訴えを耳にします。

そこには、国の政策という大きな政治的な問題が絡んでいますが、その根底には、私たち国民一人一人の関心の低さと自分のことだけで精一杯という意識の問題が関わっているように思います。そうした私たちの自己中心的な思いが、弱い立場の人や行き場のない人を放置し、間違った政治を温存させる結果を招いているのです。

今また、2 年に及ぶコロナ禍の中で、人とのコミュニケーションがとれなくなって、孤独死する老人や、引きこもりになる若者、不登校になる学童などが増え、自殺者も増えていると言われます。多くの人が、孤立化し、自分の居場所を失っているのです。

「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」。イエスさまにも、「居場所がなかった」のです。「飼い葉おけ」は、この世のために、お生まれになったイエスさまが、人の世に「居場所」を見出すことが出来なかったことのしるしなのです。

一昔前のことになりますが、中森幾之進という牧師が初めて、東京の山谷という「どや街」に住み込んで開拓伝道を始めました。4 畳半の部屋を借りて、家のない日雇いの

労務者のための集会を開いたのですが、最初、なかなか人が集まりません。初めてのクリスマスに中森先生は、部屋の前に「イエスは宿無し」という説教題を掲げたそうです。何人もの人たちがその看板を見て、「イエスも宿無しか、俺たちと同じだなあー」とつぶやきながら通って行ったそうです。集会にはだれも来なかったそうですが、中森先生は、「とても意義深いクリスマスだった」と語っておられました。「住む家もなく、一人寂しくたむろしているここの人たちに、イエスさまが自分たちと同じ身分、同じ立場で共にいてくれるということを伝えられただけでも、うれしかった」と言われたのです。私は、この話を神学生の時に直接伺い、開拓伝道の厳しさと共に、伝道は、人を集めるだけではなく、イエスさまの恵み、神さまの愛を宣べ伝え続けることなのだ、ということを教えられました。

イエスさまも「宿無し」だったのです。今でいう「ホームレス」です。イエスさまは、そのようなこの世の最も貧しい低い場所、「底辺」に身を置くことによって、この世のすべての人々の寂しさや惨めさ、悲しみを担われたのです。それは、だれも「自分だけ独りぼっちで、寂しい」とか「自分が一番辛く、苦しい目にあっている」とか、言わないためです。「わたしが共にいて、あなたの寂しさ、苦しみ、悩みを担っているのだ」と、主は身をもって示されたのです。

さきほど、礼拝への招きの言葉の中で、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」というマタイ福音書(11:28)のみ言葉が読まれました。イエスさまは、私たちの重荷を負い、悩み悲しみを担うことによって、私たちに安らぎと平安をお与えになる方なのです。

ベツレヘムの飼い葉おけの中に宿られた主は、あのゴルゴタの十字架の死に至るまで、身を低くしてこの世に仕え、貧しき者、重荷を負い、苦労している者の友として、苦難を負い、十字架の死と復活をとおして、永遠の命への道を切り開いてくださったのです。居場所のないすべての人々に、永遠の安らぎの場を与えるためです。

飼い葉おけに宿られた主は、いつも私たちと共におられます。この主イエス・キリストを心の深みにしっかりとお迎えして、共に主の平安にあずかりたいと願います。そして、そのことによって、私たちの心に、少しでも他者を思いやる余地が与えられて、居場所を失っている人々を受け入れる居場所になれればと願います。そして、教会が、居場所のない人たちに、ほんとうの安らぎを与える「居場所」になることが出来たら、と願います。

アーメン